



ワールド・シアター・デイ 2015

真の演劇人は、えてして舞台から遠く離れた場所にいる。彼らが関心を向けるのは、約束事を複製し陳腐な表現を繰り返す機械としての演劇ではない。脈動する水源、生き活きとした潮流を、真の演劇人は探し出す。そうした水は、たいてい既存の世界をなぞることに汲々として^{きゅうきゅう}いる劇場や人々を迂回して流れている。ともすれば私たちは、観客との議論や水面下で渦巻く感情に焦点を当てた、あるいはそうしたものがなくては成り立たないとすら言える世界を創造するかわりに、コピーしてしまう。演劇ほど隠れた情熱を巧みに浮き彫りにするものはないというのに。

私が導きを求めるのはもっぱら散文だ。気づけば日夜、100年近くも前にヨーロッパの神々の凋落を、いまだ光の射さない暗闇に西洋文明を突き落とした神々の黄昏を控えめに予言した作家たちのことを考えている。フランツ・カフカ、トーマス・マンにマルセル・ブルースト。こうした予言者たちの列に、現代ならば J・M・クッツェーを加えてもいいだろう。

彼らが共通して描いた、来るべき世界の——世界といってもこの地球ではなく人間関係のあり方という意味での——終焉、秩序の崩壊と動乱は、私たちにとっても痛烈なまでに身近な問題だ。終わりを迎えたあとの世界に、私たちは暮らしている。いたるところにいるメディアにすら追いつけないほど、日々、新たな場所で燃え上がる犯罪と紛争にさらされながら生きている。犯罪と紛争の炎はたちまち飽きられ、新聞やテレビから消えて二度と戻らない。誰もが無力感と恐怖と閉塞感を抱えている。もはや高い塔を築くことはならず、こつこつと積み上げた壁は私たちを守ってはくれない。それどころか、壁自体の防護と手入れに生きるエネルギーを搾り取られる始末だ。私たちはもはや門の向こうを、壁の裏をのぞいてみようとする力をもっていない。だからこそ、演劇は存在すべきなのだ。門の向こうや壁の裏に力を見出し、見ることを禁じられた場所をのぞいてみるべきなのだ。

「伝説は不可解なものを解き明かそうとする。だが真実に根ざしているものは、しょせん不可解なものとして終わらなければならない」プロメテウス神話の変容について、カフカはこう述べた。演劇もそうあるべきだと、私は強く思う。演劇にたずさわるすべての人々、舞台関係者にとっても観客にとっても、演劇とは真実に根ざし、不可解なままに終わるものであってほしいと、私は心の底から願ってやまない。

クシシュトフ・ヴァルリコフスキ

翻訳：岩田美保